

比 恵 87

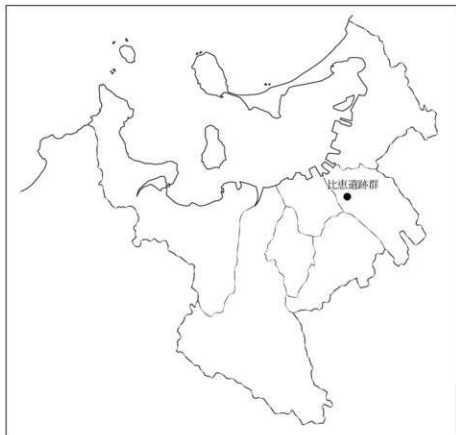
— 比恵遺跡群第 148 次調査報告 —

2019

福岡市教育委員会

比 恵 87

— 比恵遺跡群第 148 次調査報告 —



遺跡略号 HIE-148

調査番号 1641

2019
福岡市教育委員会

序

福岡市は、古来より大陸文化の門戸としての役割を担い発展した歴史をもち、地中にはそれを物語る多くの埋蔵文化財が存在しています。本市ではこれら文化財の保護に努めているところではありますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財に関しては、事前に発掘調査を実施して記録保存を行うことで後世に残しています。

本書は事務所建設に伴い、博多区博多駅南4丁目で行った比恵遺跡群の第148次調査の報告です。比恵遺跡群は弥生時代から古墳時代および古代を中心に栄えた福岡市を代表する遺跡の一つですが、今回の調査では、当該期の大溝を確認しました。溝からは多量の土器が出土しており、長期にわたって使用されたことが明らかになりました。このことは遺跡全体像の解明にもつながる貴重な成果です。

本調査の成果が文化財保護への認識と理解を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって多大なご理解とご協力をいただきました株式会社トキワ様をはじめとした関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は、福岡市教育委員会が平成29年2月7日から4月5日まで博多区博多駅南4丁目で行った比恵遺跡第148次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構は、溝をSD、不明遺構をSX、柱穴状遺構をSPとそれぞれ記号化し、01から通して番号を付した。
3. 本書で使用した方位は、すべて国土座標北（世界測地系）である。
4. 本書に掲載した遺構実測、遺物実測、遺構写真撮影、遺物写真撮影、製図、執筆、編集は中尾祐太による。
5. 本書に係る記録と遺物は、整理後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、管理・活用する。

調査番号	1641	遺跡略号	HIE-148
調査地	福岡市博多区博多駅南四丁目102番1	分布地図図幅名	037
申請地面積	679.96㎡	開発面積	523㎡
調査実施面積	449.5㎡	事前審査番号	28-2-511
調査期間	平成29年2月7日～平成29年4月5日		

本文目次

I	はじめに	1
	1. 調査にいたる経緯	1
	2. 調査の組織	1
	3. 遺跡の立地と歴史的環境	2
II	調査の記録	9
	1. 調査の概要	9
	2. 遺構と遺物	10
	(1) 溝	10
	(2) 不明遺構	20
	(3) ビット	28
	(4) その他の出土遺物	30
III	小結	30

挿図目次

Fig1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig2	第148次調査地点および周辺調査地点位置図 (1/2,000)	4
Fig3	第148次調査地点および周辺調査地点位置図 (1/1,000)	5
Fig4	第148次調査地点位置図 (1/500)	5
Fig5	第148次調査遺構配置図 (1/200)	6
Fig6	第148次調査南西側壁面土層断面図 (1/100)	6
Fig7	各グリッド遺物出土状況 (1/200)	10
Fig8	SD22 実測図 (1/80)	11
Fig9	SD22 出土遺物実測図 1 (1/3)	13
Fig10	SD22 出土遺物実測図 2 (1/3)	14
Fig11	SD22 出土遺物実測図 3 (1/3)	16
Fig12	SD22 出土遺物実測図 4 (1/3)	17
Fig13	SD22 出土遺物実測図 5 (1/3) (1/2)	18

Fig14	SX23 実測図 (1/80)	20
Fig15	SX23 出土遺物実測図 1 (1/3)	22
Fig16	SX23 出土遺物実測図 2 (1/3)	23
Fig17	SX23 出土遺物実測図 3 (1/3)	24
Fig18	SX23 出土遺物実測図 4 (1/3)	25
Fig19	SX23 出土遺物実測図 5 (1/3)	26
Fig20	SX23 出土遺物実測図 6 (1/3)	27
Fig21	SP20 実測図 (1/20) および出土遺物実測図 (1/3)	28
Fig22	SP21 実測図 (1/20) および出土遺物実測図 (1/3)	29
Fig23	その他の出土遺物実測図 (1/3)	30

写真目次

Ph1	調査第 1 区全景 (北東から)	7
Ph2	調査第 2 区全景 (南から)	7
Ph3	調査第 3 区全景 (南から)	8
Ph4	調査第 4 区 (トレンチ) 全景 (南から)	8
Ph5	調査区南壁土層 (北から)	9
Ph6	SD22 (西から)	12
Ph7	SD22 出土遺物 (13)	15
Ph8	SD22 出土遺物 (14)	15
Ph9	SD22 出土遺物 (18)	19
Ph10	SD22 出土遺物 (19)	19
Ph11	SD22 出土遺物 (22)	19
Ph12	SD22 出土遺物 (29)	19
Ph13	SD22 出土遺物 (30)	19
Ph14	SD22 出土遺物 (31)	19
Ph15	SX23 完掘状況 (南西から)	21
Ph16	SX23 完掘状況 (北東から)	21
Ph17	SX23 出土遺物 (34)	23
Ph18	SX23 出土遺物 (41)	25
Ph19	SX23 出土遺物 (45)	26
Ph20	SX23 出土遺物 (46)	26
Ph21	SX23 出土遺物 (55)	27
Ph22	SP20 遺物出土状況 (北西から)	28
Ph23	SP20 出土遺物 (56)	28
Ph24	SP21 遺物出土状況 (北から)	29
Ph25	SP20 出土遺物 (57)	29

I はじめに

1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区博多駅南4丁目102番1における事務所建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成28年9月20日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれていること、確認調査が実施され現地表面下105cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、事務所建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成29年2月6日付で株式会社トキワを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年2月7日から発掘調査を、平成30年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

2. 調査の組織

調査委託：株式会社トキワ

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成28年度・資料整理：平成30年度）

調査総括：文化財部埋蔵文化財課（現・文化財活用部埋蔵文化財課）課長 常松 幹雄（28年度）
課長 大庭 康時（30年度）
同調査第2係長 加藤 隆也（28年度）
大塚 紀宜（30年度）

調査庶務：埋蔵文化財課管理係 係長 大塚 紀宜（28年度）
同係 横田 忍（28年度）
文化財活用課 課長 松本 真人（30年度）
同管理調整係長 藤 克己（30年度）
同係 松原加奈枝（30年度）

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係 係長 佐藤 一郎（28年度）
本田浩二郎（30年度）
同主任文化財主事 池田 祐司（28年度）
田上勇一郎（30年度）
同係文化財主事 清金 良太（28年度）
山本 晃平（30年度）
調査担当：埋蔵文化財課調査第2係（現・同課事前審査係） 文化財主事 中尾 祐太

発掘作業：唐島栄子、村山巳代子、中村桂子、栗野孝子、安東昌信、許斐拓生、上野照明
鷲崎哲夫、松岡奏

整理作業：樋口三恵子、花田友美子

3. 遺跡の立地と歴史的環境

福岡平野は北側を博多湾に限られ、東側を三郡山地からのびる丘陵性山地、南西を脊振山地、および脊振山地から派生した丘陵によって画された低地の小平野である。平野内には宝満山に発し北流する御笠川、脊振山系に発し北流する那珂川がそれぞれ博多湾に注ぎ込んでおり、両河川およびこれらから派生する中小河川の開析作用によって形成された中位段丘面が島状に断続的に連なる。一帯は花崗岩風化土層を基盤としており、その上に堆積した通称鳥栖ローム層および八女粘土層と呼称されるAso-4火砕流堆積物から成る台地である。比恵遺跡群はこれら丘陵群のうち最も北に位置する。遺跡南端には東西方向の浅い鞍部があり、これより南には那珂遺跡群が展開する。両者は「周知の埋蔵文化財包蔵地」として区別されてはいるものの、遺構の展開その他に有機的な関係が認められ、実質一連の遺跡群として考えられている。また、両遺跡群および周辺遺跡は「奴国」の一部を構成する弥生時代～古墳時代前期の拠点集落として知られ、多種多様な遺構、遺物が検出されている。

比恵遺跡群は旧石器時代から中世の複合遺跡であるが、継続した集落の端緒となるのは刻目突帯文土器を基準とする弥生時代早期で、本時期から弥生時代前期の遺構は、遺跡北西部の丘陵縁辺部で確認されており、検出遺構には貯蔵穴・水溜遺構・貯木土坑等がある。なお、同時期の那珂遺跡群では二重環濠が造営される。弥生時代前期後半になると遺構の分布範囲は各所に展開するようになり、中期前半以降は丘陵中央付近の高位部へと集落が進出する。竪穴住居や土坑の他、狭棺墓群が検出されており、なかには細型銅剣を副葬するものも確認されている。中期中頃～後半になると、丘陵中央を中心に遺構が爆発的に増加する。出現期はやや遡ると考えられる井戸は、当該期になると、普遍的に造営されており、掘立柱建物も当該期を前後して増加する。また、本時期には、後に拡大する大小の溝状遺構が掘削されはじめる時期でもある。後期になると、遺跡中央東、本調査地点の南東部で1号環溝が造営され、以後場所を変えつつ3号環溝、2号環溝が掘削される。前代に掘削が開始された条溝は明確に街区として機能するようになり、後代に道路状遺構として整備される溝状遺構の原形も各所に認められる。集落そのものも特に井戸の検出数からみて継続的な集住傾向が認められる。終末期になると、先行する道路状遺構を結合するように道路が造営される。両側側溝を有し、比恵遺跡群北西から那珂遺跡群中央まで1.5km以上の規模をもつ。那珂遺跡群では道路終点付近で九州最古級の前方後円墳である那珂八幡古墳が造営される。本時期前後になるとそれまでの奴国の中枢、須玖岡本遺跡の遺構は激減し、衰退することが分かっている。以上のことから本時期前後に中枢が移動したものとされている。その後、上記の大集落は古墳時代前期前半までは保持されるものの、前期後半以降、遺構の検出は極めて散漫になる。

再び遺構が増加するのは古墳時代後期である。6世紀第2四半期に三重の周濠を巡らす東光寺剣塚古墳が築造され、この時期を前後として集落が各所で再び営まれる。また、比恵遺跡群の北西では多重柵列と大型掘立柱建物などが数か所で確認されており、規模・構造などから日本書紀にみられる「那津官家」に関わる官衙関連遺構として認識されている。以降の官衙関連遺構は、那珂遺跡群に収斂されるようで、7世紀の正方位の溝が掘削され、瓦や硯が出土している。中世においても散発的に遺構・遺物が確認されており、村落がひろがっていたことは明らかではあるが、詳細については未だ不鮮明である。

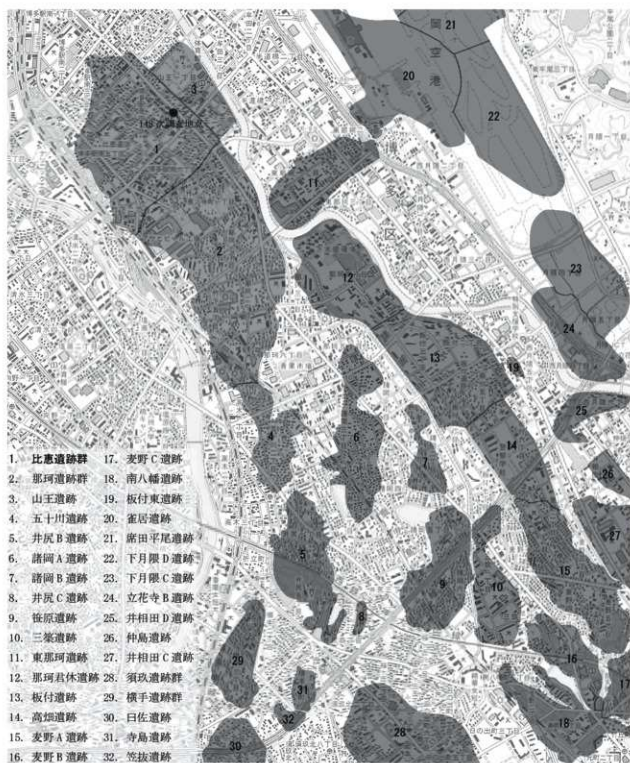


Fig1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

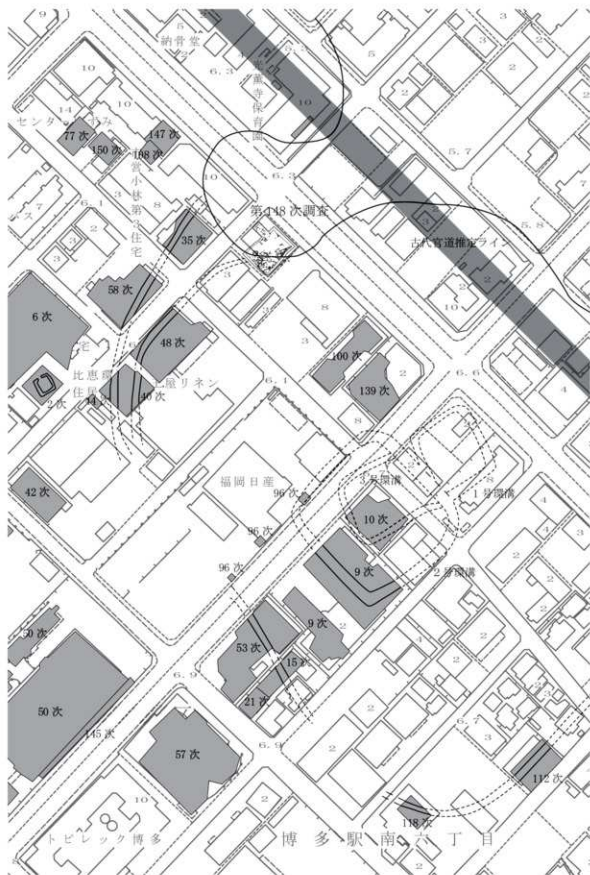


Fig2 第148次調査地点および周辺調査地点位置図 (1/2,000)



Fig3 第148次調査地点および周辺調査地点位置図 (1/1,000)

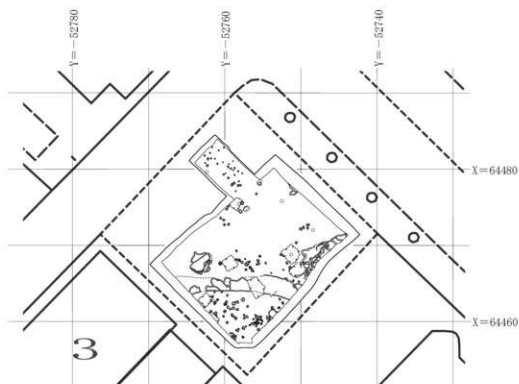


Fig4 第148次調査地点位置図 (1/500)

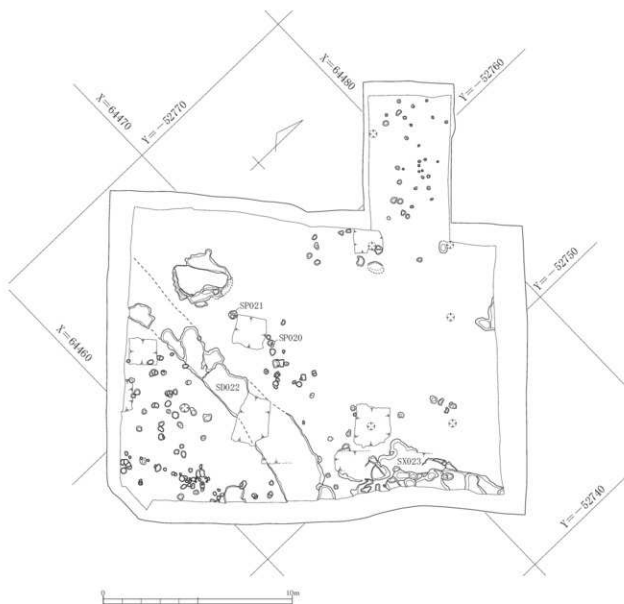
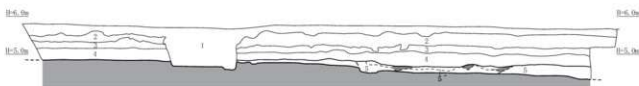


Fig5 第148次調査遺構配置図 (1/200)



1. 表土及び攪乱
 2. 客土
 3. 暗灰色粘質土 (旧水田層)
 4. 灰褐色粘質土 (水田床土)
 5. 黒褐色粘質土 (遺物包含層)
- 5'. 黒褐色粘質土 (包含層のうち遺物がまとまって出土する箇所 (溝の覆土か)。アミは遺物が特に集中する部分。)

Fig6 第148次調査南西側壁面土層断面図 (1/100)



Ph1 調査第1区全景（北東から）



Ph2 調査第2区全景（南から）



Ph3 調査第3区全景（南から）



Ph4 調査第4区（トレンチ）全景（南から）

II 調査の記録

1. 調査の概要

148 次調査地点は遺跡の中央東寄り、いわゆる「中央台地」と通称される台地の東側縁辺に位置しており、調査地点より東には谷地形がひろがる。

本調査は敷地面積 679.96㎡のうち、事務所建設工事により埋蔵文化財に影響があると考えられる範囲で実施した。調査面積は 449.5㎡である。

基本層序は Fig6 に示すとおり、表上下 GL - 60cm 程度までが表土及び現代の客土で、以下 GL - 90 ~ 100cm が旧水田層、床土である。調査区の南西ではその下で地山面である烏栖ローム層・八女粘土層を検出した。北にかけてゆるやかに地形が落ち、南西側壁面の北端では GL - 135cm で八女粘土層となる。この間には湿地堆積層の黒褐色粘質土が堆積しており、北に行くにしたがい厚くなる。なお南西側の台地残存部は平面的にみたら烏栖ローム層と八女粘土層が漸移的に変化するが、これは削平によるもので、少なくとも烏栖ローム層は本来さらに高い位置にあったものと考えられる。

調査に先立ち 2 月 7 日に機材等の搬入を行い、翌 2 月 8 日の表土掘削をもって調査を開始。廃土置き都合上、調査は全体を 4 分割して実施したため、まず調査区の南西側の約 5 割程度を 1 区として設定した。1 区では溝、ピットなどを検出した。遺構検出・掘削・記録を順次行い、1 区の調査は 3 月 7 日で終了。翌 3 月 8 日に調査区を反転。2 区は調査区の東側に設定し、弥生土器を多数含む不明遺構を検出した。記録後 2 区の調査は 3 月 22 日に終了。翌日以降 2 区のさらに北東部にあたる 3 区の調査に着手。この時点で明確な遺構は存在しなかったため、3 区のさらに北にトレンチ上に 4 区を設定し、遺構の有無を再確認した。自然地形による窪みや生痕は確認できたが、3 区同様明確な遺構は確認できず、4 月 4 日までにすべての記録を終えた。翌 5 日に撤収、及び残務処理を行い、調査にかかる全ての作業を終了した。



Ph5 調査区南壁土層（北から）

2. 遺構と遺物

(1) 溝

溝は1条検出した。

SD22

調査区の中央やや南寄りに位置する溝で、東西方向に延びる。覆土には多くの遺物を包含している。周辺の地形及び発掘調査に先立って実施された確認調査の結果から、当初は本遺構の南側の立ち上がり台地を台地の落ちと認識しており、落ち際に遺物が集中するものと推定していたが、遺構検出の結果、遺物集中範囲が帯状に延びることが明らかになった。したがって溝の可能性も考え、さらに精査したが、本遺構が北東側にひろがる湿地状の堆積土上から掘り込んでおり、この湿地堆積土と遺構の覆土が類似すること、また本調査地点が低地に位置しており雨天時以外でも湧水することから平面的に遺構プランを確認できなかった。したがって、やむを得ず遺構のプランは全体を徐々に掘削しながら確認し、遺物は調査区内に任意に設定した2mグリッドごとに取り上げることにした。結果的に遺構の全容が明らかになったのは覆土をほぼ除去した底面付近であった。遺構北側の立ち上がりはわずかに残っていないが、完掘後の土層観察から溝と判断した (Fig6・Ph5)。また、土層観察の結果、遺物の包含単位に不自然なまとまりが認められることから、複数回の掘り直しが行われていたことが明らかになった。Fig8に示した縦断面の凹凸も掘り直しによるものか、断面は場所によって異なるが、

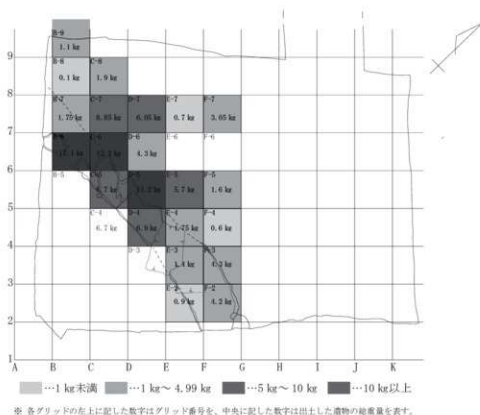


Fig7 各グリッド遺物出土状況 (1/200)

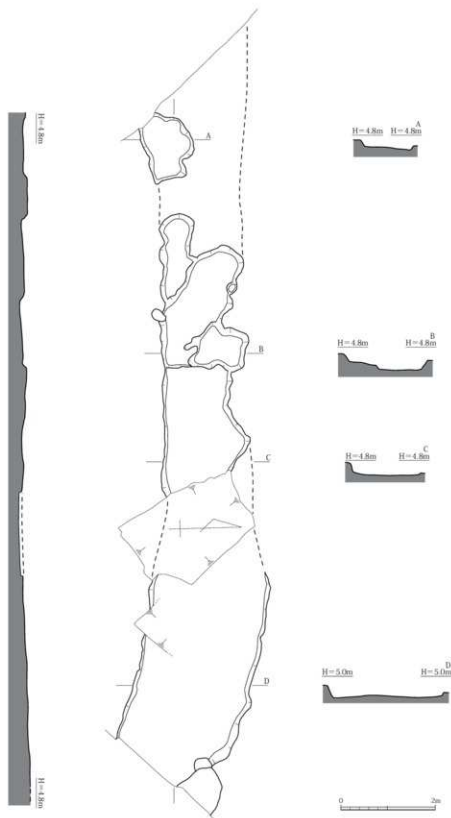


Fig8 SD22 実測図 (1/80)



Ph6 SD22 (西から)

逆台形を基本とする。本遺構からは広い時期の遺物が出土しているが、弥生時代中期と終末期の遺物にまとまりがみられ、わずかではあるが後者を中心とする。本調査地点の南西に位置する40次調査地点・48次調査地点で検出されている溝（Fig2・Fig3）と比較するとやや時期幅が広いが、断面形等の対応から、同一の遺構として差し支えないだろう。

出土遺物

以下、出土遺物を器種ごとに記載する。1～3は壺である。1は小型の壺。復元口径は9.2cmで、器高は12～13cm程度であろう。胴部は丸みを持ち、頸部との境は鋭い稜をなす。口縁はほぼ水平な鋤先状口縁である。器壁の摩耗が著しく調整は不明瞭。2は袋状口縁壺の口縁片である。外面はやや粗い原体によるハケ仕上げ。内面は口縁端部を丁寧に成形していることから、その後ハケ目が施されるものの、ナデの痕跡が明瞭に残る。3は複合口縁壺の口縁片。屈曲はやや弱く、口縁端部は平坦面をもち、厚い。内外面ハケ目仕上げ。4～17は甕である。4～12は中型の甕であるが、図示したとおり広い時期幅のものが出土している。4～7は口縁片。各時期の遺物を古いものから順に記載している。4は逆L字状の口縁をもつ甕。短い口縁部はやや内傾し、端部は薄い。上部平坦面はやや丸みをもつ。5は鋤先状口縁の甕である。口縁は全体的に厚く、上面はほぼ水平。胴上半には断面三角形の突帯を巡らせる。6は「く」の字状の口縁をもつ甕。頸部の屈曲は弱く口縁端部にむかってゆるく立ち上がる。残存部から推定して胴上半にある最大径が口径をやや上回るか。外面タテハケ、内面ヨコハケ仕上げ。7は弥生時代終末期～古墳時代初頭の南九州系の甕か。外面には右上がり方向の叩きが口縁端部付近まで施され、端部には刻み目を有する。8～12は底部片。口縁片同様時期別に古いものから記載する。8はやや厚い上げ底状の底部。外面には端部から丁寧なタテハケが施される。9は薄い平底である。底部貼り付けの際の接合痕が残る。全体的に摩耗しており、内面は剝離が著しい。10はやや不安定な平底をもち底部と体部の境も稜をもたずゆるやかに立ち上がる。11・12は近畿V様式系甕の底部か。11は全体的に摩耗しており、調整は不明瞭。12は底面内部に置状のハケ目が施される。13～17は大型の甕である。いずれも頸部で屈曲し、外傾しながら立ち上がる「く」の字形の器形をもつ。13の体部は肩が張らない倒卵形を呈し、頸部でゆるやかに屈曲して立ち上がる。

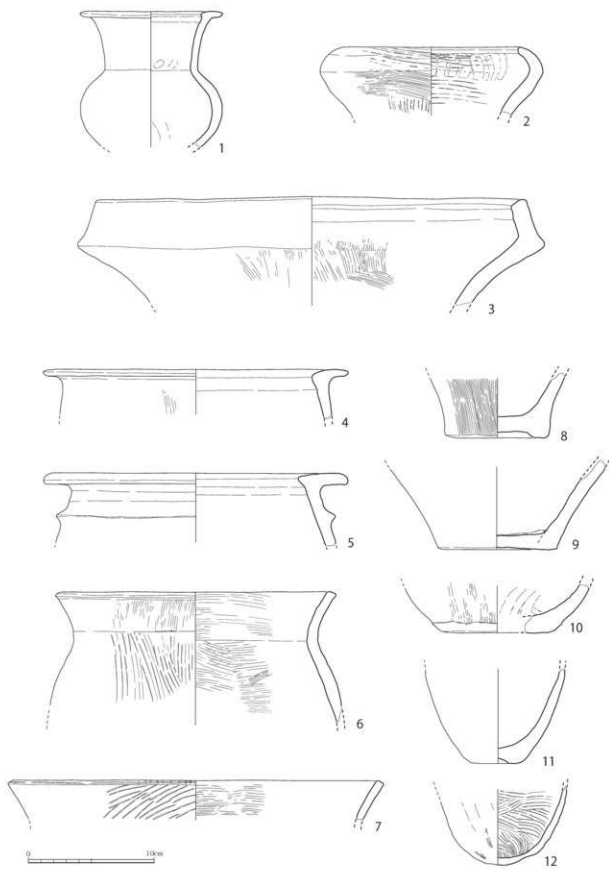
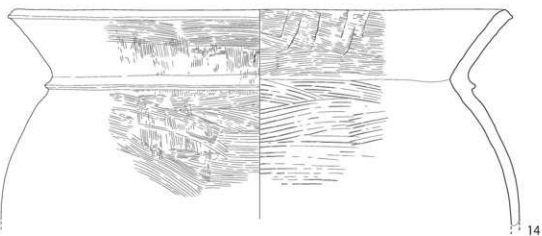
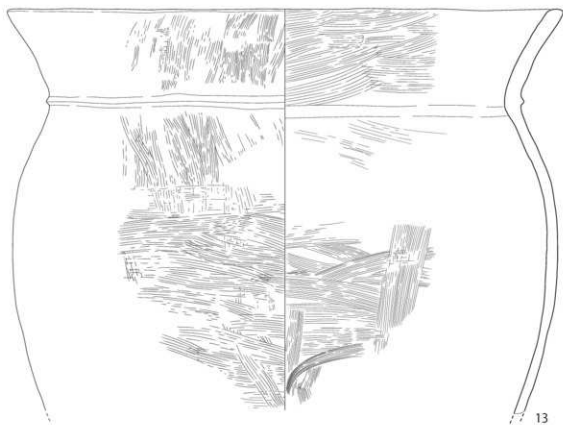


Fig9 SD22 出土遺物実測図1 (1/3)



0 10cm

Fig10 SD22 出土遺物実測図2 (1/3)



Ph7 SD22 出土遺物 (13)



Ph8 SD22 出土遺物 (14)

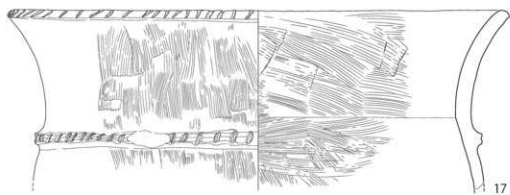
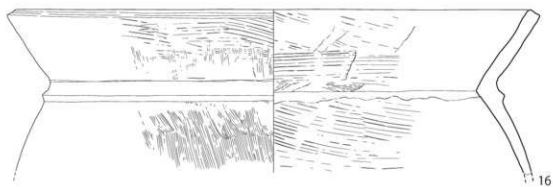
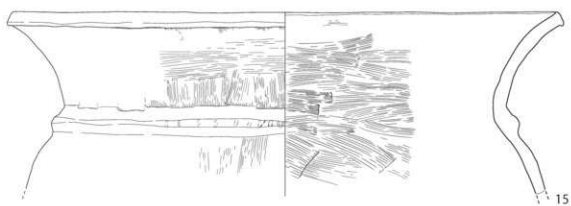


Fig11 SD22 出土遺物実測図 3 (1/3)

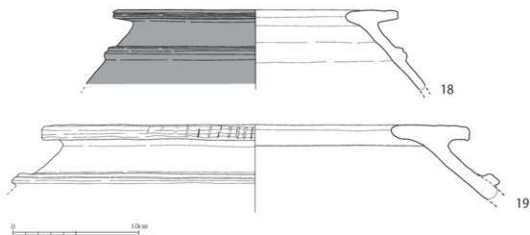


Fig12 SD22 出土遺物実測図4 (1/3)

立ち上がりの角度はややゆるく、端部はやや丸みをもつ。頸部には断面三角形の小さな突帯を有する。外面はタテハケ後、胴部中位から下位にヨコハケが施される。内面は胴部下位がタテハケを基本とする雑なハケ、中位以上は一単位が短いヨコハケが施される。14の頸部の屈曲は鋭く、外傾しながら直に立ち上がる。口縁端部には平坦面をもち、下方が外側に突出する。頸部には断面三角形の突帯を巡らせるが、屈曲部のやや下に位置する。外面は規則性がない乱雑なハケ、内面はヨコハケだが、特に口縁部付近は一回の単位が短い連続的なハケが施される。15は頸部の屈曲が緩やかで、口縁は外反しながら立ち上がる。口縁端部は強いナデにより平坦面をもち、角が突出する。頸部の突帯は台形状を呈し、刻目が施されるが、摩擦のため不鮮明。外面タテハケ後、口縁部付近のみヨコハケ、内面はやや雑なヨコハケが施される。16の口縁はやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部は強いヨコナデのために中央が凹む。頸部の屈曲は比較的急で、直下に貼りつけられた突帯は断面三角形を呈する。外面は胴部がタテハケ、口縁部はヨコハケ後擦過痕状のタテハケ、内面はヨコハケが施される。17は屈曲が極めて弱く、胴部と口縁部の境が不明瞭で口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁端部および突帯にはハケの原体による突帯が施される。外面は一単位が短い連続的なタテハケ、内面は左上がりのハケの後、胴部のみヨコハケによって仕上げられる。18・19は鉢である。18は外面に丹塗りを施す。ほぼ水平の鋤先状口縁をもち、口縁下には断面M字突帯を巡らせる。調整は不明瞭だが、内面には粘土紐の織ぎ目と考えられる等間隔のうすい稜線が残る。19は大型の鉢。口縁は内側への突出が顕著で、やや垂下する。端部には刻目が施される。口縁下には突帯が巡る。突帯はM字状を志向したもので中央が窪む不整形を呈する。器壁が荒れており調整は不明瞭。20～22は器台である。20は器座。器壁は比較的薄く立ち上がりは緩やかである。外面にはタテハケの痕跡が強く残る。21は口縁部か。器壁は厚い。外面タテハケ、内面は口縁部付近のみヨコハケが施され、体部にはシボリ圧痕が残る。22も口縁部。口縁部は強く外反しながら立ち上がる。23～26は高坏である。23～25はいずれも同じタイプのもので、脚部上半は細く、裾ががラッパ状に広がるものである。26は近畿V様式系の高坏。脚部上半が中身である。27は支脚である。28は甕の把手である。やや小ぶりて小さな突起状の粘土塊の上にさらに粘土を被せ成形している。29は匙形土製品。ほぼ完形であるが一部を欠損する。30は泥岩製の石包丁。2カ所の穿孔の他に、途中で中止された非貫通穴の痕跡が残る。31は手づくね成形されたミニチュア土器である。

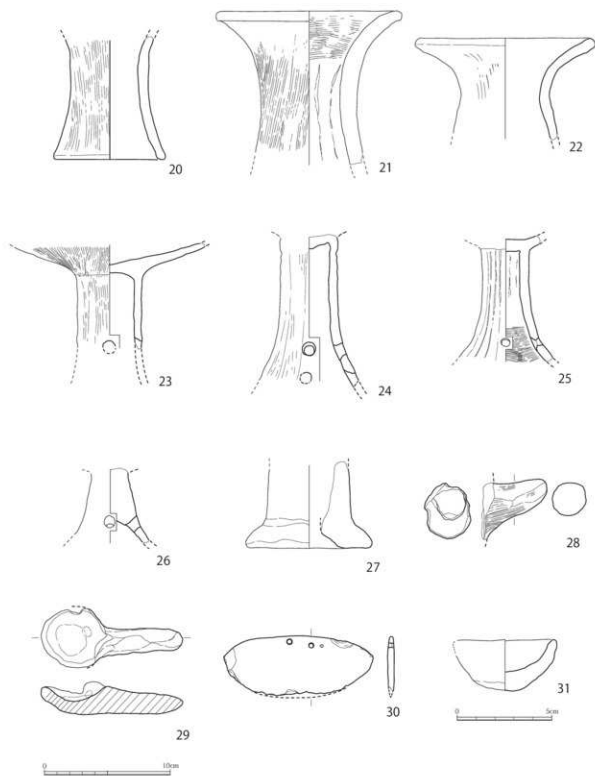


Fig13 SD22 出土遺物実測図 5 (1/3) (1/2)



Ph9 SD22 出土遺物 (18)



Ph10 SD22 出土遺物 (19)



Ph11 SD22 出土遺物 (22)



Ph12 SD22 出土遺物 (29)



Ph13 SD22 出土遺物 (30)



Ph14 SD22 出土遺物 (31)

(2) 不明遺構

詳細不明の遺構は1基検出した。

SX23

調査区東側で検出した。ここでは不明「遺構」とするが、平面は極めて不整形で、かつ床面の凹凸も著しいことから、人工的に掘削されたものとは言い難い。本遺構は台地の落ち際に位置しており、調査区の北東側には谷地形が広がることから、台地の際が開析されることによって形成された大規模な窪み状の痕跡と考えられる。SD22同様、覆土は調査区に広がる湿地堆積土と極めて酷似するが、覆土からは多量の遺物が出土した。浸食作用によってできた窪みに台地から流出した遺物が溜まったものだろう。出土遺物は時期幅があるものの、弥生時代中期後半の遺物が多く、開析されたものこの時期前後と考えられる。

出土遺物

32・33は大甕である。32は口縁部の一部のみ残存。残存部から胴部中位～上位に最大径がある丸みを帯びた器形であろう。口縁部はT字形を呈する鋤先状口縁で、内側が強く張り出す。33は胴部上半から頸部にかけて直線的に窄まり、頸部でゆるやかに屈曲してやや外傾しながら立ち上がる。口縁部は内湾しており内側が突出する。頸部には断面三角形の突帯が巡る。器壁が荒れており調整は不明瞭。34～40は壺である。34は部分的に欠損するがほぼ完形である。底部は平底でやや外反しながら立ち上がり、胴部は扁球形を呈する。頸部と口縁部の境は明瞭で、稜を有する。口縁部は下半はゆるやかに上方に立ち上がり、上半で外側に広がる。口径は胴部最大径よりわずかに小さい。口縁端

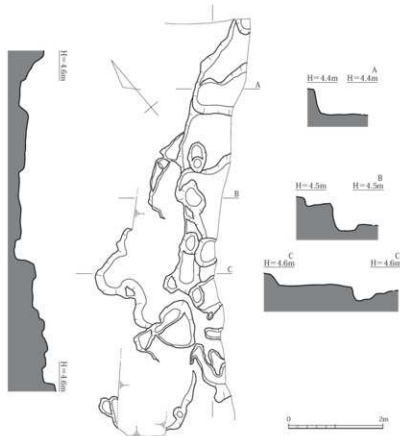


Fig14 SX23 実測図 (1/80)



Ph15 SX23 完掘状況（南西から）



Ph16 SX23 完掘状況（北東から）

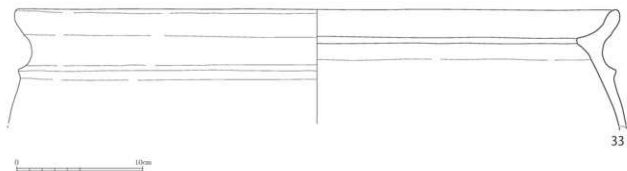
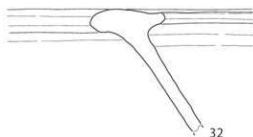


Fig15 SX23出土遺物実測図1 (1/3)

部はわずかに垂下する T 字状をなす。胴部の最大径付近には断面口の字形の突帯を 2 条巡らし、その間には暗文を施す。暗文は口縁部にも残り、ハケ調整後ハケ目をナデ消した後に施される。内面の頸部付近には接合時のものと考えられる指頭痕が多く残る。35・36 は胴部上半～口縁部が残存する。35 は肩が張らない胴部をもち、頸部で強く屈曲する。口縁は直線的に立ち上がるが、端部付近で緩やかに外側に開く。口縁端部は丸くおさめる。摩擦により外面の調整は不明瞭。内面には頸部付近に指頭痕が多数残る。36 の胴部はやや肩が張る。頸部は直角に近い角度で屈曲し、口縁部につながる。口縁部は下半が直線的で、上半で外側に強く広がる。口縁部外面には丁寧なタテハケが施され、内面にはヨコハケが残る。上記の壺同様、頸部付近には指頭痕が明瞭に残る。37～40 は底部片である。37 はやや薄い平底をもち、底部付近からやや外側に開きながら立ち上がる。底部内面には強い指頭痕が残り、器壁にも凹凸が目立つ。38 の底部付近の立ち上がりの角度はやや急である。外面には縦方位の丁寧なミガキが施される。39 はやや上げ底状の底部である。外面には縦方位のミガキが残る。40 は丹塗りを施す。外面には横方位のミガキが密に残り、外底部にもミガキを施す。内面に指頭痕が多数残る。41～43 は甕である。41 は胴上半～口縁部が残存する。外面には丹塗りが施される。胴が張らない砲弾形の器形で、口縁下で窄まる。口縁部はやや弓なりに湾曲する鋤先状口縁で、口縁端部は断面 M 字状を呈する。口縁下には突帯が巡るが、口縁端部同様断面は M 字状を呈する。42・43 は口縁部片である。42 は胴上半が窄まらず直線的に立ち上がり、口縁下で強く屈曲し口縁部へといった。口縁は内傾する長い逆 L 字形を呈する。口縁部下には断面三角形の突帯を巡らせるが、調整が甘いためか、突帯貼り付けの痕跡が顕著に残る。43 はわずかに内傾し内側がやや突出する鋤先状口縁をもち、胴部は口縁下でわずかに窄まる。44～46 は鉢である。44 はやや胴が張る甕の可能性もある。胴部中位付近に最大径があることが推定され、わずかに内湾するが、ほぼ直線的に窄まりながら立ち上がる。頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は外傾しながら立ち上がる。外面タテハケ仕上げ。45 は外面に丹塗りを施す。立ち上がりは直線的で口縁はやや内傾する鋤先状口縁をもつ。口縁

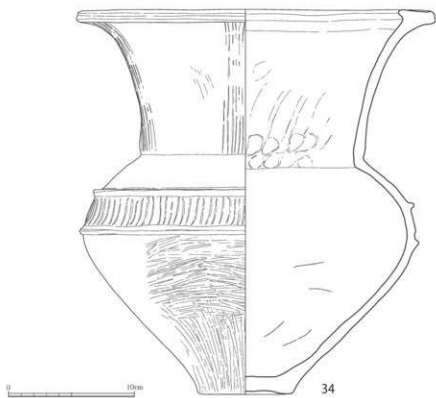


Fig16 SX23 出土遺物実測図2 (1/3)



Ph17 SX23 出土遺物 (34)

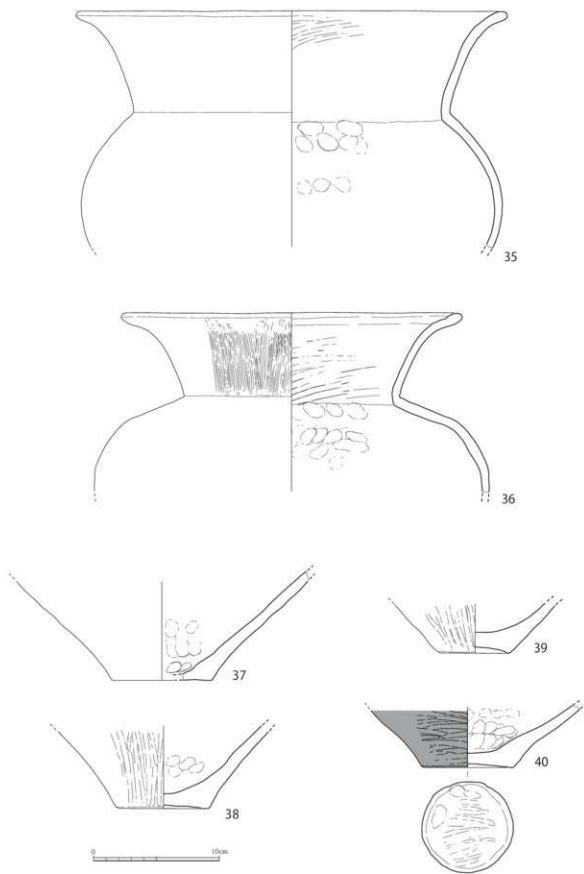


Fig17 SX23 出土遺物実測図 3 (1/3)

部は丁寧なナデによって成形されているが、口縁部下には成形時についたと考えられる爪の痕跡が残る。46も外面に丹塗りを施す。頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁端部は肥厚し、強いナデにより上方、下方に突出する。口縁部には外側からの穿孔が施される。47～50は甕。いずれも底部片である。47はやや薄い上げ底で、外面には底端部際から丁寧なタテハケが施され、底部の角が際立つ。48は平底であるが外底面がわずかに窪み、上げ底状を呈する。外面には端部際からハケが施される。49は薄い平底である。ハケ目は端部直上から施されるが、底部と胴部の境はやや丸みをもつ。50は薄い平底をもち、体部は内湾しながら立ち上がる。外面タテハケ仕上げ、内面には工具痕が多数残る。51・52は高坏である。51は坏部。やや深くわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや内傾する鋤先状口縁をもつ。内面にはヨコ方位の調整の痕跡がわずかに残る。ミガキか。52は外面に丹塗りが施された脚部である。裾部にかけてラッパ状に開く。外面タテハケ後ミガキ仕上げであるが、下半にはハケの痕跡が残る。53は土師質の把手である。胴部との接合部が残存する。54は土製の投弾。断面は正円を呈する。55は砂岩製の石斧である。刃部が著しく潰れていることから、破損後に蔽石その他の用途に転用されたものか。

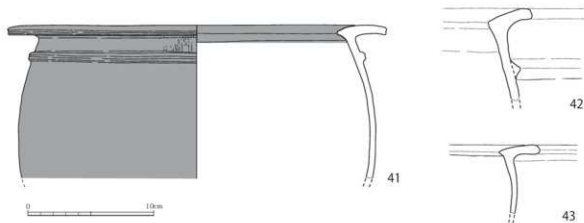


Fig18 SX23 出土遺物実測図 4 (1/3)



Ph18 SX23 出土遺物 (41)

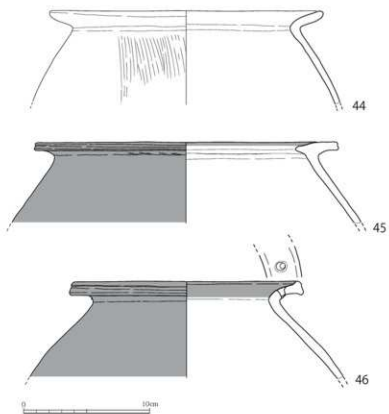


Fig19 SX23 出土遺物実測図 5 (1/3)



Ph19 SX23 出土遺物 (45)



Ph20 SX23 出土遺物 (46)

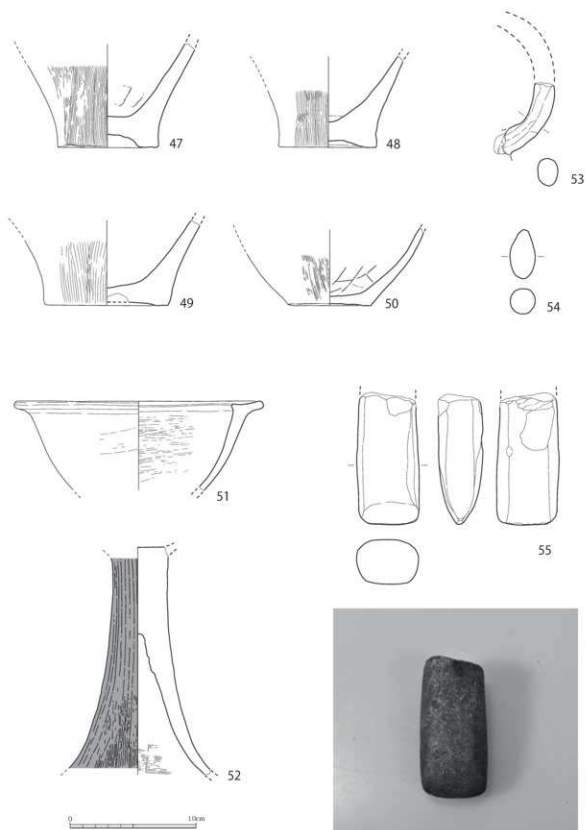


Fig20 SX23 出土遺物実測図6 (1/3)

Ph21 SX23 出土遺物 (55)

(3) ピット

ピットは複数基検出したが、特に SD22 北半の低地で検出したものの大半は地山の罅や窪みに湿地堆積土が溜まったものであり、人為的に掘削されたものは少ない。ここでは遺構と考えられるものうち特徴的なものを記載する。

SP20

調査区中央やや南西寄りで検出した平面不整形の柱穴である。後述する SP21 の東側に位置しており、両者の配置は SD22 とほぼ平行である。本遺構の上層からは以下に図示する土器が出土した。類例は近接する 44 次調査の SP153 がある。時期は出土遺物から弥生時代中期後半～後期初頭の範疇におさまるだろう。

出土遺物

56 は鉢もしくは壺とすべきか。底部は薄く、やや上げ底状となり胴部との境が明瞭であるため、底端部が断面三角形になる。胴部は扁球形を呈するが、やや歪んでいる。胴部上半で強く窄まり、頸部で緩やかに屈曲しながら口縁部へと連なる。外面の調整は胴部下半の底部際のみで確認でき、底部成形時のナデの後に粗い原体による連続的なヨコハケが底部際から施される。内面には板状工具によるナデの痕跡が放射状に残る。

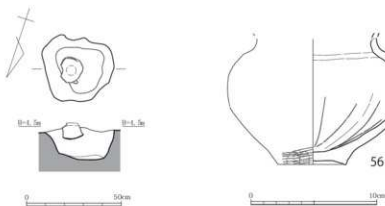
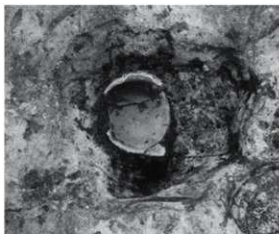


Fig21 SP20 実測図 (1/20) および出土遺物実測図 (1/3)



Ph22 SP20 遺物出土状況 (北西から)



Ph23 SP20 出土遺物 (56)

SP21

調査区の中央やや南西寄りで検出した。前述した SP20 の西側に位置する。平面は不整形円形を呈する。北西側にはテラス状の段をもち床面はやや傾斜する。壁面の立ち上がりはほぼ直である。床面直上で以下の土器が出土した。出土遺物から以降の時期は SP20 と同時期もしくは極めて近い時期と考えられる。

出土遺物

57 は鉢である。特に外面は器壁の剥離が著しい。底部は薄い平底である。胴部は球形を呈し、最大径は中位付近にあり、比較的安定した器形である。頸部の屈曲はやや強く、内外面に稜をなす。口縁部はやや外反しながら立ち上がり、端部はわずかに中央が凹み断面 M 字状となる。外面タテハケ、内面は底部付近に右方位の放射状のハケを施し、胴部は右上がりのハケによって仕上げられる。

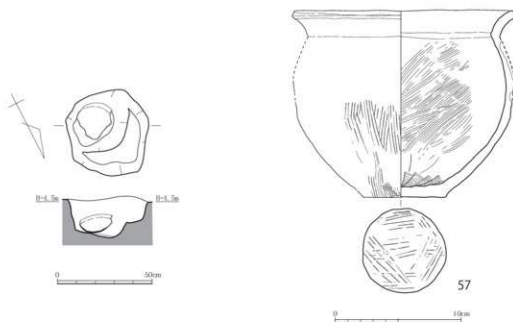


Fig22 SP21 実測図 (1/20) および出土遺物実測図 (1/3)



Ph24 SP21 遺物出土状況 (北から)



Ph25 SP20 出土遺物 (57)

(4) その他の出土遺物

その他の出土遺物として、上記の SP20・SP21 以外のピット及び、自然的要因が強い窪みから出土した遺物を記載する。出土遺物は極めて少なく、いずれも小片である。時期を特定できる遺物は以下の 2 点のみである。58 は甕の口縁片である。短い逆 L 字状の口縁をもち、ほぼ水平であるが、わずかに垂下する。外面にはタテハケの痕跡がわずかに残る。59 は庄内式系の台付鉢である。脚部、坏部ともにわずかに残存しない。胎土は非常に精緻である。著しく摩耗しており、調整は不明瞭。

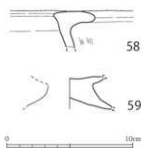


Fig23 その他の出土遺物実測図 (1/3)

III 小結

最後に本調査成果を既往の周辺調査結果と合わせまとめたい。調査の概要でも述べたが、比恵遺跡群が展開する博多駅南付近は過去の大規模な区画整理事業によって、著しい土地の改変が行われており、本調査地点でも調査面の検出レベルがほぼ平坦であることから削平されていることが分かる。削平の度合いは SD22 の残存部が示すとおり、極めて大きい。そのため、遺構の残存状況は良好とはいええず、溝 SD22 を除けばピットを数基検出したのみである。したがって、台地際の様相は不鮮明といわざるを得ない。ただし遺物に関してみれば溝 SD22 および不明遺構 SX23 からはまとまった量の遺物を確認している。一定の遺物量が確認されるのは弥生時代中期前半から中頃の須玖 I 式期である。当該期の遺構は本調査地点の西側に近接する 35 次調査地点で確認されている。やはり削平により柱穴しか残存しないが、竅穴住居に伴う柱穴との可能性が推定されている。ただし、その他の周辺調査地点をみると当該期の遺構はほとんど検出されておらず、未だ活発な土地利用とはいえない状況である。その後、中期後半には 35 次調査地点及びその南西に位置する 58 次調査地点で大溝が掘削される。この時期になると近辺まで集落が拡大していることは、本調査地点で検出した SX23 の出土遺物量からある程度は想定できるが、近辺の調査地点における当該期の生活遺構は不明確である。後期になると、初頭前後に本調査地点の北東側で 1 号環溝が造営される。また、遺跡全体の遺構増加に対応するように、対象地の西側に所在する各調査地点においても井戸を典型とする生活遺構が爆発的に増加する。SD22 は弥生時代終末期前後の遺物が最も多いが、本時期、および若干時期が遡る遺物が出土している。この大溝は南西側に位置する 40 次調査・48 次調査の成果によれば弥生時代後期中頃～古墳時代初頭のものと考えられるが、SD22 の断面、土層で認められた掘り直しの痕跡をみると、溝の掘削時期はやや遡る可能性も考えられる。この大溝は広範囲にわたって延びるものと考えられており、周辺地域における今後の調査結果に期待したい。溝の埋没時期については上記の既往の調査結果と矛盾せず、古墳時代初頭には役割を終えたものと考えられる。溝が埋没した後、一帯の土地利用は再び低調となるようで、周辺はもちろん遺跡全体でみても、古墳時代中期以降の遺構はほとんどみられない。その中で本調査地点では甕の把手が 1 点出土しており、周辺における遺構の存在を窺わせる。

報告書抄録

ふりがな	ひえ87							
書名	比恵87							
副書名	比恵遺跡群第148次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1375集							
編著者名	中尾祐太							
編集期間	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	平成31年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
比恵遺跡群第148次	福岡市博多区博多駅南四丁目102番1	40132	0127	33.34.48	130.25.54	2017.2.7 ～ 2017.4.5	449.5m ²	事務所建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
比恵遺跡群	集落跡	弥生時代	溝、不明遺構、柱穴	弥生土器、土師器、石器				
要約	<p>対象地は中央台地の東側縁辺部に位置する。本調査地点では台地の草ち原を確認しており、落ち際に沿うように溝を検出した。溝は土層観察から掘り直しの痕跡が認められ、覆土からは弥生時代中期～古墳時代初頭にいたる遺物が多数出土しており、比較的長期間に渡って存続していたと考えられる。なお、本溝は周辺調査地点で検出された溝と同一のものと考えられる。その他明確な生活遺構は検出していないが、台地が開析された痕跡と考えられる不明遺構からは弥生時代中期の遺物が多数に出土しており、周辺における当該期の集落の展開が想定される。</p>							

比恵 87

比恵遺跡群第 148 次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1375 集

2019 年 (平成 31 年)3 月 25 日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印刷 田堀印刷有限公司

福岡市中央区草香江 1 丁目 8 番 24 号
